

『高政と友重は別人説』について質す

野々下 晃

(会員 佐伯市晞子)

佐伯史談一七三号(平成八年十月二十日発行)『温故知新録と戸倉家伝記について』の記事中、高政と友重を同一人物として扱っている記述に対して、会員森秀郷氏(高知県市場町在住)から、『高政と友重は別人である』という趣意の左に挙げる様な意見と共に資料が寄せられた。因に氏は同族として森氏の研究については、その深奥を極められた学識者である。

△森氏の主張▽

(一) 平成八年十一月五日付けで寄せられた意見の要旨
私は森一族について調べている。一七三号記事「中毛利民部大輔友重と、森織部についての」ところに眼がとまった。民部大輔友重は毛利河内守豊臣秀頼の息で、御地木付城・日出城にゆかりのある毛利豊後守重政の実弟である。毛利高政と、民部大輔友重とは別人である。私が発表し

た『森一族について』を送る。

(二) 平成八年十一月十六日付けで寄せられた意見の要旨
早速貴重な資料(私より)を送ってくれて礼をいう。但し、御申越の森民部大輔友重と、毛利高政とは同一人物でない。資料を同封する。

・ 森高政は森十郎左衛門尉^②正次の実子で、兄九郎左衛門尉^③高次(別名十郎左衛門尉重高)の猶子である。
・ 毛利兵橋重政(秀吉の小姓)は九郎左衛門尉^④高次の孫で、父は毛利新助良勝、後の羽柴河内守豊臣^⑤秀頼、またの名毛利河内守秀頼の実子であって、御地木付城主であった毛利豊後守重政のことである。弟は若狭守吉勝

・ その弟が森民部大輔友重である。御賢察を乞う。

(三) 平成八年十二月三日付けハガキによる意見の要旨
高政は慶長六年に森を毛利に改めている。毛利豊後守(和泉守)の被官である。関ヶ原以降大名に列した。(森氏は佐伯にも調査に来ている)

(四) 平成九年一月十一日付けで送られてきた意見と資料の要旨

・ 毛利家文書（長州毛利家と察す）には、毛利民部友重、宮木長次、早川主馬、毛利兵橋重政のみで高政の名はない。（逆説的に言えば、友重と高政は同一人物であるからではないか）

・ 毛利伊勢高政は、慶長六年四月末では森勘八高政、高政が毛利に改め任官し、伊勢守を名乗るのは前述の通り。高は養父の高、政は実父の政を採ったと思う。諱を変更する際は余程の手柄か、よくよくのことがない限り変えることはない。

・ 『日本外史』は、通称毛利甲斐守は長州の毛利とされているが、毛利河内守秀頼が初めに任官したのが甲斐守である。通説の史書は斯波秀頼と片付けている。斯波管領の娘が猶女、秀頼の姉または妹として養女にしたためである。この女は浅井新八郎政高室になった人、浅井田村丸の女である。

・ 慶長十九年（一六一四）、大阪冬の陣で城中の将の中に、旧姓森民部名で入城している。

・ 天正十三年（一五八五）、四国征伐の際、牛田又右衛門への秀吉の使番として、森兵橋が役目を果たしている。

・ 森監物は始め十郎左衛門政次と名乗っていた。森高次十郎左衛門重高の弟である。末子高政を兄高次の子秀頼（秀政）の猶子とした。兵橋重政の勘八高政を弟としていた。弟として日田城を預けていた。兵橋重政は秀吉の小姓であり、秀吉のそばを離れることは出来なかった。そこで豊前を叔父の毛利壱岐守勝信に、また、豊後を勘八高政に代官させたと思う。

・ 蜂須賀家文書、赤堀文書等に豊前・豊後十二万石とある。後年、豊前壱岐守勝信に割愛したものと思う。

(五) 平成九年一月二十五日付けで送られてきた意見と資料の要旨

・ 私は現存している歴史の通説を、表面だけでなく裏面から横からと、角度をさまざまに変えてみることにしている。真実が出て来る。

・ 勘八高政は寛永五年（一六二八）十一月十六日七十三歳没とあり、弘治三年（一五五七）生まれである。

・ 高政はどの角度から調べても②⑨高次の実子ではないと思う。

・ 播磨国明石郡松の郷三千石は、高政二十代前半の功もないのに三千石の大領をくれる筈がない。九郎左

衛門尉高次（当時河内守と思われる）に与えられ、その代官として赴任したと思う。

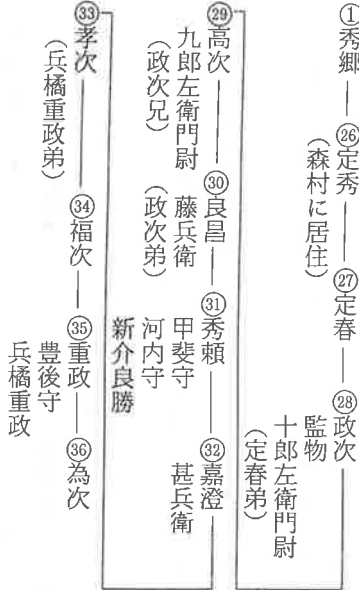
・ 民部大輔友重は天正十六年（一五八八）の隨身、その他と最後に慶長十九年（一六一四）に出て来る。

・ 藤堂高虎は豊臣秀次の老臣で改易後高野山に登る。

高虎が感状を書いたころは五万石であったと思う。それより身分の高い民部である。

以上五通が森氏の「高政と友重が別人説」に関する資料である。

森家系図（抜粋）



〈私の主張〉

高政—実名友重に関する地元佐伯に伝わっている史料『佐伯市史』は、昭和四十九年五月市史編さん委員会が編集し、市長名で発行された市の正史に値する史書であるが、その第三章に、藩祖高政については実に二十四項目、約四十頁を費やして詳述している。その中で特に『高政の実名は友重』と題して、次の様に記している。

毛利高政は通称勘八または勘八郎、任官して民部大輔のち伊勢守、実名を友重といった。しかし、佐伯藩旧記をはじめ、毛利氏家系譜・寛永重修諸家譜・大閣記・徳川実記などの史書は、いづれも勘八郎高政または民部大輔高政と書き、友重の名を記していないが、高政に友重と称していた時代があったことは事実で、温故知新録にも民部大輔友重とあり、また、現存している毛利家古文書にも、文禄五年から慶長二年末までのものに、『民部大輔友重在判』としたものが、数通あるとしている。

なお、今回次に例示した史料は、戸倉家から現在秋山家に伝わっている古文書であるが、いづれも高政から森織部行重に与えた感状や、宛行状の類であって、文禄五年（一五九六）から慶長三年（一五九八）日田時代末ま

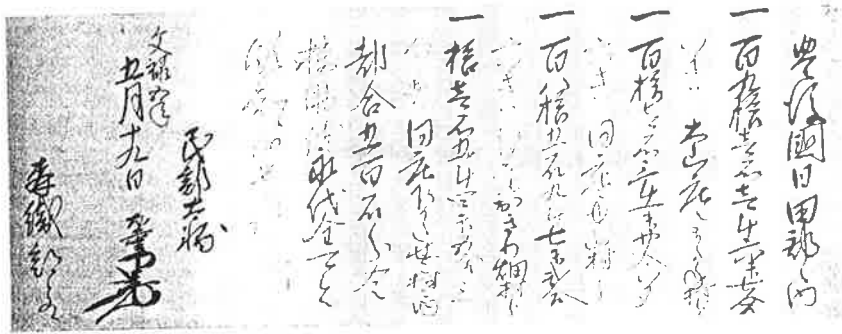
でのもの三通には、民部大輔友重と署名花押されている。

また、慶長六年（一六〇一）十二月十日佐伯で与えた宛行状には民部大輔高政とあり、同十二年五月七日（この日行重は府中において三十六歳で病死）の文書には伊勢守高政とある。

戸倉家々譜によると、元祖行重は九歳の時から毛利高政に仕え、三十六歳で死亡するまで生涯、高政に仕えている。

この史実は藩の正史『温故知新録』にも載っているが、『高政と友重』が別人説を採るとすれば、行重は二君に仕えたことになる。

なお、別に佐伯市史は高政の祖先と題して、『藩祖高政は尾張の人森九郎左衛門尉高次の子で、母は瀬尾氏永禄二年の生まれである』として、高次の実子説を採っている。これに反して森氏は、どの角度から調べても高政は高次の実子ではなく、森十郎左衛門正次の実子で、兄高次の猶子（養子）であるとして、政次の実子説を採っている。森氏が主張する高政と友重別人説には、この辺りの認識の差にも主因があるのではないか。いづれにしても対象の史実は、四百年前に溯り、いづれが真か即断



文禄5年発給の宛行状（友重名）

は慎まねばならぬが、森氏の説を採ると佐伯市史や戸倉家伝記は崩れてしまう。（参考資料 佐伯市史・佐伯藩史料温故知新録・戸倉家伝説）

ながりく
 文はみそ
 一編あり一編
 さいまし者
 てまうしりな
 くしとくは
 しくちけり
 我面を年
 後ちりせし
 乙卯
 九月廿七日
 友重文

慶長2年発給の感状（友重名）

七〇
 加増
 赤衣
 由
 おし
 物
 天
 下
 乙卯
 九月廿七日
 友重文

慶長3年発給の宛行状（友重名）

乙卯
 九月廿七日
 友重文

慶長12年発給文書（高政名）